

静かでにぎやかな町

陳怡敏

教育学部 交換留学生 中国

三月末、桜が満開の季節に、和歌山県に来た。この見知らぬ期待の土地では、数多くの初体験で積み重ねられている。例えば、様々な国の学生たちと授業を受けることや和歌祭に沸き立つ人の波に身を投じること、日本ならではの濃厚な味わいのラーメンを食べることなどである。特に授業が始まってからは、キャンパスに戻ってきた喜びとともに、新しさと興奮が溢れた。

来日する前に、日本人の先生から日本の生活について話を聞き、留学した先輩から和歌山の話聞いた。しかし、すべてベールで覆われていたようで、霧の中で見る花のように、ぼんやりとしていた。今ではようやくこの地に足を踏み入れ、自分の目でこの地の風景を眺めることができる。留学を選んだことが最善の選択だったと確信している。

生活習慣は人によって異なるため、同じ町に住んでいても、それぞれに違った感じを抱くものだ。私は静かなほうが好きなのだが、ちょうど和歌山はそういう町である。故郷の



近くには有名な観光地があるので、祝日はもとより、週末でも人でにぎわい、道が混んでいる。その故郷と比べ、現在住んでいるところは人通りが少なく、混雑もせず、落ち着いている。目的もなく、影を踏み、街をゆっくり歩くと心が楽になり、日頃の疲れが消える。紀の川は山から発して、多くの都市を流れ、やがて海に至る。都市の喧騒から離れ、流れる水と鳥だけが残し、緑に囲まれた土地はまるで別世界のようだ。

和歌山に来る前に、先輩が「うちの大学は山の中にあるんだよ」と言っていた。「しまった！大変だ。都心から離れていたら不便かもしれない。」と不安にかられた。けれども、実際は違っていた。近くにはコンビニ、スーパーや料理店が揃っており、私にとって非常に便利である。和歌山の朝、自転車

で学校に行く時、坂道は飛び跳ねの音符になる。これは私に体を久しぶりに鍛える機会を与えてくれる。

このライフスタイルは中国とは雲泥の差があるといっても言い過ぎではない。残念なことに中国の学校の寮は、多人数部屋であることが一般的である。高校一年生時の寮では、一部屋につき八人が入居し、狭くて混んでいた。二年生になると、六人になった。それが大学に入ると、四人で一部屋になった。人数は徐々に減っていくものの、変わらないのは誰かと一緒に暮さなければならぬことだ。一人静かに過ごすのが好きな私にとって、まるで蜂の巣に押し込められているかのようなような暮らしは、ストレスになっていた。それに対して、和歌山での生活は、私に一人の世界を与えてくれ、心を躍らせてくれている。

しかしながら、人間は所詮は群れの星で、社会に溶け込みにぎやかな環境に身置くことが必要である。アリストテレスは「人間は必然によって社会的な生物である。」と言った。

長時間一人で部屋にいと、にぎやかな雰囲気を感じたいくなるのは当然のことだと思う。この時、和歌山で開催されるイベントや国際交流課で主催するイベントが最適な調整剤となる。先生は留学生同士で和歌祭を楽しみましょうと励ましてくれたり、温泉に行って湯気の中で疲れを取りなさいと勧めてくれたり、日本人学生との交流を深めさせてくれる。これら一連の体験を通じて、和歌山という町や和歌山の人々をより深く知ることができる。

まずは「唐人」として、和歌祭に参加したことは、私にとって非常に貴重な経験だった。和歌祭は、普段は静かだった都市にまるで活力を吹き込む精霊かのように映った。東照宮と周辺の街では華やかな雰囲気に包まれていた。先生は常にそばにいてくれて、私たちが何をすべきかを細かく導いてくれた。ほかの種目の人々や見物にきた市民も熱心だった。和歌祭を通じて、和歌山の歴史や文化をもっと深く理解することができた。そして、最も心に残っているのは初めて温泉に行った時のことだ。想像していたのとはずいぶん異なり、奇妙な体験だった。

最後に印象的なことは、日本人の学生と共同授業を受けたことだ。日本人の学生とチームを組み、チームミーティングを重ね、課題を進める。笑いに満ちていた。先生もクラスメートも留学生の世話をしてくれている。難しい問題にぶつかると、お互いに協力し助けあう。そして課題をクリアすることができたら、達成感が湧き上がるのだ。和歌山の人々は親切だと思う。学生や先生はもちろんのこと、道で出会う人までも、温かさを与えてくれる。それで、和歌山の情熱を感じる。



要するに、和歌山は静かでのんびりとした町だと感じるのだ。二つの感覚は併存する。静かさとは、山を越えて吹き降りる風や一人で聴く音楽だ。生活環境の静かさだけではなく、心の平静というものだ。宮崎駿監督のアニメ『天空の城ラピュタ』に「土に根を下ろし、風と共に生きよう。種と共に冬越え、鳥と共に春を歌おう。」という言葉がある。この言葉は前進する勇気を与え、生活をもっと愛するようにと歌っている。一方で、にぎやかさとは、人々の温かさや活動と祭の雰囲気だ。留学生仲間と一緒に遊び、国々の生活を分かち合う。元々は壁だった言葉が、コミュニケーションの架け橋になっている。異国においても温かさを感じることができる。

今の私にとって、和歌山での生活はなくてはならない宝物になっている。光陰矢の如し。知らず知らずに二ヶ月が経った。ここでの生活は、単なる留学以上のものだ。ここで出会った人々、感じた自然、味わった文化すべてが忘れることなく、輝かしい思い出になり、とっておきの詩行となるだろう。

三月末，在樱花盛开的季节来到和歌山县。在这片陌生又充满期待的土地上，铺陈了许多珍贵的初次体验——第一次跟不同国家的人上课，第一次跻身日本祭礼的人潮，品尝日本独有的日式拉面。而当大学的钟声敲响，怀揣着那份重归校园的雀跃，对课堂充满新鲜感。

来日本之前，听外教讲述日本的生活，听前辈记忆中的和歌山，但似乎都蒙着一层纱，雾里看花般只有模糊的轮廓，让我不能拼凑出它的真实模样。当我真正踏上这片土地，能够亲眼见到这个城市，向我诉说它的故事，我终于相信留学是一个正确选择。

人各有异，即使生活在同一座城市，也会有不同的感受。我偏爱安静的氛围，恰好和歌山就是这样一座安静的城市。我的家乡毗邻风景名胜，终日被人潮车马的喧嚣裹挟。和歌山与之不同，我所居住的街道行人疏落，路途开阔。在街上漫无目的地踩着自己的影子，可以消除一天的疲惫。纪之川自高山蜿蜒而来，穿城而过，最终投入大海的怀抱。这里就像世外桃源，远离城市的喧嚣，被一片绿色包围，只剩下流水和鸟鸣。来这之前，前辈坦言说我们的大学在山上。我便理所当然地认为远离城市十分不便，为此心生惴惴。当我真正踏足这片土地，惊喜地发现周边便利店、超市、餐馆的招牌林立，甚至比母校浙江师范大学多了几分便利。值得一提的是，浙江师范大学也是远离市中心，风景优美。在和歌山的早晨，我骑着自行车去学校，一路上的坡道化作了悦动的音符，权当一场久违的锻炼了。

中日两国的生活方式有着天壤之别。遗憾的是中国的大学是多人宿舍。高一的时候是八人一寝，高二变成六人一寝，大学是四人一寝。虽然人数在减少，但集体生活的浪潮始终裹挟着我前进。对于偏爱独处的灵魂而言，就像被装进拥挤的蜂巢，很多时候并不轻松愉悦。而和歌山的生活赠予我一方独处的天地，令人心驰神往。

然而人类终究是群居的星辰，虽然沉迷于安静的时光，但有时候也需要热闹的篝火来融入环境。亚里士多德说过，人天生是政治的动物。当我在静谧中久驻，便会想念城市的热闹繁华。而学校的国际交流课和和歌山市举办的各种活动变成了最佳的调节剂。老师鼓励我们投身和歌祭的欢乐，组织去泡温泉，在温泉的氤氲水汽中洗去疲惫，安排与日本同学为伴。以此为契机，我更深入地了解了和歌山这座城市，以及和歌山的人们。

和歌山的人们都很亲切，不论是老师学生，还是路上遇到的陌生人，都是如此。因此这座城市是有温度的。和歌山安静与热闹交相辉映，我愿沉浸在这静与喧中。远处山风徐徐吹来，一个人感受音乐与心跳共振，都是安静的。这不仅是生活环境上的宁静，更带来心灵上的平和。就像宫崎骏导演的动漫天空之城中的一句话，“我们扎根在土壤，和风一起生存，和种子一起过冬，和鸟儿一起歌颂春天。”这句话给了我前进的勇气，使我更加热爱生活。另一方面，人与人之间的温暖和活动时的氛围是热闹真切的。与留学生结伴游玩，互相分享自己国家的生活，让语言的壁垒化作沟通的桥梁。这使我在异国他乡也能感受到温暖。

对于现在的我来说，和歌山的生活是难得的珍宝。光阴如箭，不知不觉中我已经在这里生活了两个多月了。多希望这场剧永远不会落幕。在这里的生活，不仅仅是留学生活。在这遇见的人，感受大自然，品味日本的文化，成为闪光的回忆，成为值得珍藏的诗行。